

岸田日出刀著『オットー・ワグナー』の出版経緯とその意義について

The background and the significance of the publication of "Otto Wagner"(1927) by Hideto Kishida

○勝原基貴¹, 大川三雄²*Motoki Katsuhara¹, Mitsuo Ohkawa²

This paper discusses the background and the significance of the publication of "Otto Wagner" (1927) by Hideto Kishida (1899-1966), through the bibliographical analysis of the literatures on Otto Wagner (1841-1918) and the interpretation of Kishida's remarks at his lecture commemorating the 10th anniversary of Wagner's death. Through his critical biography and lectures, Kishida indicated that Wagner's work should not be interpreted superficially or with contemporary standard. Kishida analyzed the architectures of Wagner's time and the social background of that time, and evaluated his life.

1. はじめに

岸田日出刀は、11ヶ月に及んだ世界一周の旅行から帰国した後、約半年間の歳月を掛け、1927(昭和2)年に『オットー・ワグナー』(岩波書店)を出版する。洋行以前から既に雑誌等に建築に関する随筆を寄稿していたが、この本が初めて出版した書籍となった。同書は、1914年に出版されたA.ルックスの著書『OTTO WAGNER』を訳出し、若干の主観や批評を加えながらまとめたもので、後に新聞紙上で石本喜久治により痛烈な批判文が掲載される¹⁾が、我が国で最初のワグナーに関する評伝本となった。本稿では、ワグナーに関する文献の書誌学的な分析とワグナー没後十周年を記念して開催された講演会²⁾での岸田の発言内容の読解から、岸田が『オットー・ワグナー』を出版した経緯とその意義について考察する。

2. 明治末・大正期におけるワグナーの紹介記事

・セセッションの受容(田邊淳吉, 岡田信一郎)

明治末頃からセセッションの潮流を紹介する記事のなかで、近代建築の始祖と認識されていたワグナーが取り上げられるようになる。1912(明治45)年7月、雑誌『建築ト装飾』が、セセッションに新建築・新意匠の活路を期待する「せせつ志よん号」を特集する。伊東忠太らが執筆者に名を連ねているが、この中で田邊淳吉は、訪欧米時の体験を元に「「オットー・ワグナー」と維納」と題した記事を寄稿する。また同号に「中形の浴衣とライスカレー」と題するセセッション論を發表した岡田信一郎は、雑誌『学生』(大正3年9月号)にて、「セセッション建築の泰斗オットー・ワグネル」を發表し、これを増補した原稿「オットー・ワグネル」を雑誌『現代之建築』に1914(大正3)年12月から3号にわたって連載する。『学生』は「立志号」と題され、各界の偉人を紹介する特別号

であったが、岡田は建築界の代表としてワグナーを取り上げている。セセッションの動向の紹介にとどまらず、存命中であったワグナーを高く評価し、「SECESSIONとは」「新運動第一の振鈴」「若きワグネル」「建築は人智の最高表現」「簡単に印象深い建築」「清新にして而も穩健」「セセッション団の勇士」「壘太利の誇り」の8章を通して、近代建築の進展に先導的な役割を果たしたワグナーの意義を伝えている。

・分離派建築会の世代(大内秀一郎, 石本喜久治)

大内秀一郎は『欧州近代建築の潮流』(大正12年)の中でワグナーを取り上げ、「近代建築とオットー・ワグネル」と題した章を載せている。2頁の短い文章ではあるが、「使用すべき物質と構造に応じて、建築物の正面を充分個性を帯びたものに作り上げる場合に最も強く客観性と実用性を望んで止まなかった。」とワグナーの建築作品の傾向をみている。

大内は、分離派建築会の一員であったが、石本喜久治が述懐しているところによると、分離派建築会の活動の一環として各会員がセセッション運動に関わりのある人物の伝記を一人ずつものしようとする計画があった。石本は、ヨゼフ・ホフマンの担当となったそうだが、欧州への渡航でワグナーの作品に触れ、帰国後はワグナーの担当を志願する³⁾。

3. 評伝本の出版と「オットー・ワグナーを偲ぶ会」

岸田による評伝本の出版を契機に、岡田信一郎は、石本にワグナーを記念する懇談会の開催を提案する。石本は、分離派建築会に提案を行うが、会として独占的にすべきでないとの結論に至り、広く若手建築家の会合とすることになる⁴⁾。1928(昭和3)年4月28日、岸田ら7名が発起人となり、国民講堂(国民新聞社内)において、ワグナー没後十周年を記念する講演会を開催する。岡田信一郎(病氣療養のため不演)、

1 : 日大理工・院(後)・建築, Graduate Student, CST., Nihon-U. 2 : 日大理工・教員・建築, Professor, CST., Nihon-U.

瀧澤眞弓, 岸田, 伊東忠太が講演を行い, 司会は石本, ポスターの作者は蔵田周忠であった. 分離派建築会の会員が中心であるが, このような一建築家を記念する講演会という催しは, 当時, 珍しかったこともあり, 会場から聴衆が溢れる盛んな会となった^[5]. ワグナー十年祭は, 翌月 11 日に異なる面々が登壇し, 京都・京大楽友会館でも行われる. 当時の建築界にとって, 内外から広く注目を集めたイベントとなった.

・岸田の評伝本と講演「オットー・ワグナーに就いて」

岸田の講演録は, 雑誌『建築新潮』と『薨』に掲載されている. 講演の内容は, 評伝本の構成と同じもので, 岸田は冒頭で「欧州大戦直後盛んに行はれた表現主義は, 強いて言ふならば浪漫主義的, 或は感情的乃至非科学的と云ふことが出来ますが, 最近のフランスの傾向は浪漫主義に対して言ふと古典主義的, 或は感情的に対して理智的, 更に非科学的に対して科学的と言ふことができ, 何処までも合理的である.」と述べ, 新しい傾向の建築にも変化がみられることを示し, 「目覚ましい発展をとげているが, その源を探ると, 先ずワグナーまで遡るのが順当である.」と述べる. そして, ワグナーの建築を理解する際の注意点として,

- ① 作品の表面からワグナーを解釈してはいけない.
 - ② 現代を標準として - 現代の新しい建築を標準としてワグナーを批評してはいけない.
- という 2 点を挙げ, ワグナーの時代 (19 世紀の最後の 30 年間) の建築を考える上で, 19 世紀の建築と更に建築の背景をなしたところの当時の社会について概説している. 「19 世紀の建築は, 古典主義が興り, 其反動として浪漫主義が興り, 更にルネッサンシズムとか折衷主義とか色々な思潮が起きる. ヨーロッパの建築が非常に行詰った八方塞りの時代であった.」と筋道を示し, 当時の社会は「建築とは関係なしに科学において又社会的思想において非常な進歩を遂げていた.」, 「当然当時の建築界に何等かの新しい運動が

起こらなければならないと云ふ状態にあった.」, 「ワグナーがこの新しい建築精神を發揚するためにセセッション運動の間接の主唱者となつた.」と述べ, また, セセッション運動は, 「団体の力によって成功を修めた.」と説く. 続いて, ワグナーの生涯を①ベルリンの帝室建築学院で建築学を研究した修業時代, ②ウィーンのアカデミーの教授に就任するまでの約 30 年間, ③美術学校の教授に任命されてからその死に至るまで, の 3 つの時代に区分して説明する. 最後に岸田は, ワグナーの偉大さについて「現代生活を正しく見た」, 「人としてのワグナーの生活 (非常に天真爛漫であった)」, 「ワグナーは決して齢を取らなかつた.」という 3 点をあげている.

4. まとめ

ワグナー十年祭は, 早くからワグナーに注目していた岡田信一郎を軸に, 分離派建築会の会員, 伊東忠太, 『オットー・ワグナー』を出版した岸田を含めて行われ, 広く注目を集めたイベントとなった. 岸田は, 評伝本と講演会を通して, 表面的に, かつ今日的な尺度でワグナーの作品を解釈してはならないことを示し, ワグナーの時代の建築と当時の社会的な背景を分析した上で, その生涯について評価を行った. 新しい建築の活路を見出す上でワグナーに着目している点は, 他の執筆者と共通しているが, 「古典主義の臭味を帯びている」^[6]といったワグナーの作品に対する否定的な評価とは異なる視点であった. そこには建築の支配者が, 権力でも宗教でもなく, あるいは建築家の天分でもなく, 時代思潮であることを, 洋行を通じて感じ取った岸田の考えが反映されている.

[1] 『東京朝日新聞』(昭和 3 年 3 月 16 日)
 [2] 講演会の内容については『建築新潮』(昭和 3 年 6 月号)及び『建築画報』(昭和 3 年 6 月号)を参照.
 [3] 注 1 に同じ. 石本はワグナーの伝記を發表していない.
 [4] 『建築新潮』(昭和 3 年 6 月)
 [5] 『岸田日出刀』(相模書房)所収の「先生を想う(第一座談会)」において, 佐藤武夫が「ワグナー死後十年を記念してということで, 聴衆堂に溢れるという盛んな会でした.」と述べている. p.203
 [6] 例えば, 本野精吾は『建築ト裝飾』(明治 45 年 7 月号, 増補三版)に「未だ歴史的形式の臭味を脱しえない」との所見を寄せている.



図 1 ポスター (蔵田作)

東京	
日時 : 1928(昭和3)年4月28日 午後6時~ 会場 : 国民講堂(国民新聞社内)	
講演題目及び講演者	
新建築と伝統	岡田信一郎
ゲルマン民族と文化	瀧澤眞弓
オットー・ワグナーに就いて	岸田日出刀
セセッションの回顧	伊東忠太
(司会) 石本喜久治	
発起人(イロハ順)	
石本喜久治	蔵田周忠
今井兼次	佐藤武夫
岡田捷五郎	岸田日出刀
大内秀一郎	

表 1 建築家オットー・ワグナー十年祭記念講演会内容 (東京及京都)

京都	
日時 : 1928(昭和3)年5月11日 会場 : 京大楽友会館	
講演題目及び講演者	
はじめの言葉	岡田孝男
ワグナーに就ての感想	東畑謙三
感想	森田慶一
ウィーンを訪れた当時の思出	武田五一
おはりの言葉	服部勝吉